

古田 拓 『復習 上』から見ることばの表現

- 「復習」についての考察とそこから見える国語教育の問題点

平成 13 年 5 月 19 日発表

発表者 早稲田実業学校 東京都立青山高等学校 本郷高等学校 講師
前田 健太郎

序章 本発表の趣旨

古田 拓は、昭和 12 年に本人の国語教育観を『復習 上』（同志同行社）でまとめる。芦田 恵之助の国語教育観に影響され、垣内松三らが考えた形象理論にも関わりをもちつつ、文の基底をなす「ことば」について深く考察を深めていた古田であるが、戦前期に古田が考えていた国語教育観とはどのようなものであるか、特に本発表においては、「復習」とはどのようなものであるのか、この点を明らかにすることに重点をおきつつ、『復習 上』を考察することを目的とする。

第 1 章 古田 拓 『復習 上』と国語教育研究との関係

まず、『復習 上』がどのような背景において書かれたものであるか、確認しておく。

大正 5 年 芦田 『読み方 授』
大正 10 年 垣内 『国語の力』
昭和 12 年 古田 『復習 上』
昭和 13 年 芦田 『式と 壇』

本発表で注目したい点として、古田「復習」理論と芦田「七変化教式」、垣内「形象理論」とに大きな関わりがあるということがあげられる。そこで、芦田、垣内の理論を本章において紹介しておきたい。

第 1 節 芦田 恵之助 「七変化教式」

芦田 恵之助の「七変化 式」については昭和 13 年の『式と 壇』（同志同行社）で詳しく見るができるが、それ以前からこの理論は芦田によって打ち出されている。そして、古田はこの「七変化教式」を『復習 上』においても引用している。

芦田先生が、あの七変化 式の中で、時間無くして何か省かねばならぬとしても、師のよみだけは最後まで残したい。子供のよみ、教師のよみ、子供のよみ、これで終つてもよい。口で説けぬ事が 師のよみから子供に伝わるとおつしやられた事がこの時わかつた気がした。
(『復習 上』40 頁)

その時、芦田先生の 式の、第二の「話しあひ」といふこゝろがわかつた様な気がしたのである。これは問答ではない。
(『復習 上』137 頁)

ここで「式」と述べているものが、芦田の「七変化教式」にあたる。

では、芦田の「七変化教式」とはどのようなものであるか。ここで、確認しておきたい。芦田「七変化教式」については、小林和彦¹⁾が第一次教式から第四次教式までの移り変わりにつ

*1 小林和彦「芦田教式の成り立ちとうけとめと」（『入門芦田恵之助』（『教育科学国語教育』87 3 月臨時増刊号）昭和 62 年 3 月 明治図書）より

いてまとめているので、それをもとにここでまとめてみた（【表1】参照）。

第四次教式と第二次教式とを照らしあわせるとわかるが、芦田は、第四次における「二 とく」と「六 とく」を、第二次では「二 話合」「六 意義」というように違うことばで説明している。

広瀬節夫^{*2}の解説によると、

二の「とく」は、教師と児童の話合いによって、児童の読みえたものを教師がまとまりをつけ、学習の方向を定めて読みを進める心構えをつくる。（中略）六の「とく」は、そ

れまでの問題点を整理しつつ、文章全体の読みについて教師が助言・説明をする。それによって、児童は文章の深さやその読み方を知るのである。

古田が「第二の教式」に注目した点もこの解説で明らかとなるが、「二」は教室全体の活動、「六」は教師側からの最終的な方向づけと少し様相が異なっており、また、「二」の活動に「話すこと」（＝「表現」）が教式の中に盛りこまれている点には注意しておきたい。

【表1】

	（4教式）	（2教式）
一	よむ	通読
二	とく（話しあひ）	話合
三	よむ（師）	通読
四	かく	聴写
五	よむ	通読
六	とく	意義
七	よむ	通読

第2章 古田拡が考える「復習」とは

『復習 上』での論の核となる「復習」とは、どのようなものであるか、本章で分析していくことにする。本章では、「真」の追究、「生の可能」「よびあうもの」ということばを軸に『復習 上』における「復習」の意味を分析、考察していきたい。

第1節 「真」の追究としての「復習」

古田は、第一編に「復習」の意と国語教育におけるその再考を論じている。（【資料1】参照）古田は「復」「習」それぞれの語に注目し、その「おさらへ」のことばの深さについて説明している。

「復」については、

「更に」のふたゝびの新。「復」のふたゝびの復。その源に復つて目に新なるものとなる。（『復習 上』15頁）

というように、まず二つの視点から解釈している。まず、「さらにまた」という意味での解釈。次に「ふたたびまた」という意味での解釈。これらを十分に含んだ上での「復」であると説いている。本文にふたたび返り立ち、再考、そして深化することで新しい視点（「目」）を獲得し、より充実した「読み」を獲得するということを「復」の意味に込めている。

そして、「習」については「なれた」は「狎れた」ではないということに注意しつつ、

「ならふ」は爰に義を持つ學に訓ずべきであつた。しかるに之は「まなぶ」と訓む。語根は「ま＝真」である。こゝに、まなぶは単なる模倣ではない。爰を真とするのである。

（『復習 上』15頁）

というように、新しい視点を「真」に結びつける、その結びつける活動（「ねる」）、そして

*2 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（平成3年7月 明治図書）の「芦田七変化の教式」の項の広瀬節夫の解説による。

その活動が成熟する（「なる」）点に「習」の意義を見出したと考えることができる。

この「復習」には、「眞」の追究という、一生涯にわたる「業」的要素が多分に含まれていることがわかる。「初・中・終」という時間的経験的軸を結びつけ、それをおろそかにせず学習に取り組むこと、そこにまた「復習」の意義の深さを確認することができよう。

「初」をおろそかにしないこと、「初」の重要性については、古田が『復習 上』を執筆するに至った二つの経緯から見ることができる（【資料2】【資料3】参照）。ふたたびまた表現されたものには、必ず違いが生じる。そして、その表現は、変化、深化問わず「先達」が大きな影響を与えている。このことを古田は説き、最後に以下のようにまとめている。

が後者の 前者に対して比較にならぬのが現代ではなからうか。子供には「おさらへ」の大切なことを説く 育界においてこの弊を共有してゐるのではなからうか。先達に対しての敬愛を欠いて抽象的論理に鋭くされた所謂批判精神で得々たる人々、それは乳臭猶存して童心已に喪はれたる青年の徒のみではない様である。

起因する所は、求道的至誠を欠き、行的立場に立たぬ所からその得々は出て来るのではなからうか。（『復習 上』31頁）

「業」「行」「齋」「愛」^{*3}という「心」的要素を多分に含む、古田の「復習」の意義が、学習者自身の「心」の成長を求めるものであることはこの点からも明らかである。

「眞」の追究は、「新」なる「心」を構築すること、そして「深」化であることを古田は「復習」にその意義を込め、そして、国語教育の「読み」においてそれを実践すべきであると説いた、と考えることができよう。

第2節 「生の可能」「よぶあうもの」としての「復習」

古田の「復習」の意義として「眞」なるものの追究という点について確認したが、この「復習」の活動を見ると、

おさらへしようと思はなくとも、おのづからさせられる、それが生の深秘らしい。

（『復習 上』36頁）

というように、「させられる」「復習」というようにも古田は説いている。「させられる」という点について、本節では焦点を絞って分析する（【資料6】参照）。

それにしても、こんな歌があつたのかしらとは、何といふ迂闊であらうと自分のよみ方の疎漏を思ふと同時に、「生の角度」といふことばがうかんだ。すなはち、ある生の角度に立たぬとわからぬものがある。文の解釈も、眞の徹見といふのになればこの法則を洩れぬと知つた。それが「時」である。「ロダンの言葉」に

（中略）違つた光線とは、こゝでは、違つた生の角度をいふ。すると！

とロダンは云ふのである。光線のふしぎさは、こゝではすなはち、生の深秘である。

われらは、生の深秘の中に生れ落とされて居るのである。といふ事は「生の可能」の中にわれらは在るという事である。ゆゑに、ひとは、生きて居るかぎり「おさらへ」をさへれずには居られないのである。（52～54）

というように「生」から「復習」の在る姿を説明している。

- ・「生の角度」……多角的な視点
- ・「生の可能」……「復習」という行い
- ・「生の深秘」……人間の「生」（この点については更なる考察が必要）

*3 これらのことばには東洋哲学的要素が多分に含まれる、と考えられている。古田自身も東洋思想を『復習 上』において多く引用していることから推測できることである。

と私は解釈するが、ただこの「復習」の行いが自ずから行われるという点に注目したい。

古田は、『復習 上』（【資料6】参照）に、自律的な持続（自分の「型」）に他律的な触発（多角的な視点）が「眞実」を生むとしているのであるが、その他律的な触発は、自分の「意志」が大きく関わってくると説いている。

この点についてまとめてみると、自己の「生」・過去から継承された「精神」がよびおこされ「復」をおこす。この「生」「精神」が多角的な視点を生み出し（「生の角度」）、「復習」という行いが成立する（「生の可能」）ということとなる。例えば、

復つて新たによみがへる。さびしさをも生み、よろこびをも生む。悔恨をも生み、覚悟をも生む。これは太初のいのちの呼びごゑのためか、あるひは原訳を離れさまよひ出たわれらのよび慕ふその本性によるのか。「生の可能」はこのよぶあうものによる。

（『復習 上』73 頁）

このような「情感」「思想」は、自己に向かってぶつかつてくるものであり、その点において古田は「させられる」「復習」の点を見出したともいえよう。

一見すると、主観的な点が見受けられる。しかし、

だが、今の私の云はうとするのは、客観性を伴わぬ主観性、これをも 育は肯定しなくてはならぬといふ事なのである。

（『復習 上』306 頁）

というように主観性を否定はしていない。後にも述べるが、「よみ」という行為において、文章（ことば）を「意・事・言」三位一体のものとして考えること、「よみ」を

ところでその意味は、だから勝手に読んだらよいといふのではなく、だから、その自己を育てなければならぬ、廣く行きわたり「たしか」に見定める眼、「ゆたか」にあはれに、深く骨髓を看取する眼の人とならねばならぬとおつしやられるのである。一口に云へば客観性を包んで更にそれを超える大主観のあとを先生は要求せられるのである。

（『復習 上』305 頁）

というように、自己の愛育のために行われるものであり、「大主観」という自己にかえることが最終的な目標としている点からも、必ずしも客観的な「よみ」「解釈」という行いではないと考えてよい。

古田は「読むは呼ぶなり」（『復習 上』87 頁）ということばで「よみ」を説いている。主観性をもふまえた「よみ」に対する解釈である。「復習」にも、その理念が含まれているのである。

第3節 「ふかさ」を求める「復習」

古田の「復習」において、以下のような記述がある。

この事も「式」又は「つらぬくもの」（三部作）で詳論したいと思ふが、私は 授の指標を、「たしかさ」と「ゆたかさ」と「ふかさ」のことばにもとめてある。「ふかさ」を究極のものと考え、それは、従来の 材を掘下げるといつたやり方ではなく、それはいかに精細をきはめようと、畢竟、「たしかさ」または「ゆたかさ」の次元に属すべきもので、眞の「ふかさ」とは、さうしたものではなく、師の語黙動静を超えて、子供のたましひに徹すること、たましひをよびさますこと、彼らの生命の火を点ずること、室全体が inspire され、? 温たるものに満つることをいふのである。一言以て之を約すれば、意志的、実践的なものになる事をいふのである。しかし、それが眞の行的なものになるには「ゆたかさ」のなかに生れねばならない。だが、この「ゆたかさ」も「ふかさ」もともに、「たしかさ」を出発点とする。復習においては、まづこの「たしかさ」が第一次の通

過さるべき門であるが、今この先生の 式の第二次以後の「復習」及びこの時間配当を考ふるに、そこに深甚なる御心づかひがあると見られるのである。(『復習 上』124 頁) 古田の「復習」においても「たしかさ」「ゆたかさ」「ふかさ」の性質を説いており、古田自身がこの点においては説明をしているので、ここであげておく。

私は先生の 式の第六変化の「とく」の段層に、解、融、説の三字を当てて見た。

解とは、解剖とか鮮明とか熟し、知的側面の語である「たしかさ」はこれの属性である。

融とは、融合とか融會融通と熟し、情的側面の語である「ゆたかさ」はこれの属性である。

説とは、説法とか説道とか熟し、意的側面の語である「ふかさ」はこれの属性である。

(『復習 上』137 頁)

「復習」をここで説く「たしかさ」で止めてしまう傾向が、現在見受けられるが、この当時、古田によって深い考察がされていたことは、注目すべき点である。

古田は、これら3つの「とく」を次のように考えていた。まず、「たしかさ」であるが、これは自分自身がぶつかったもの(テキスト)にかえる、「文にかえる」という行いである。現在、国語教育で行われてしまっている「文章の解析」にあたるものである。ここで「復習」するものは「知」である。次に、「ゆたかさ」。これは、古田も説いているが、他との経験、他者との融合によりより充実したものを得るために「他にかえる」行いであると考えられる。山口喜一郎などが考える「心内語活動」^{*4} もこの一部であると考えられる。ここで得られるのは「豊潤」なる「経験」であると考ええる。

最後に「ふかさ」であるが、これが古田の「復習」における重要な点といえよう。ここにおいては、文からは離れ、自己にかえっている。自己の「生」につながるもの、「生」における自己の思想にかえり、そしてまた、「新」なる思想を形成し「眞」なる自己を形成するという「復習」の理念そのものと直結したものであるといえる。「自己にかえる」行い、ここに「復習」の最終目標がある。

「自己」について深い考察がされたであろう古田の「復習」であるが、古田自身はこのように述べている。

復習の根源はこれ^{*5}にもとめなくてはならぬ。復習の可能性は「生への要求」を目ざます事につきる。否、目ざめるのである。自由学習とはこれである。

たゞ、この目ざめる者へ、何を与ふべきか。これが 師の課題となる。この若き軍人の復習の機縁は、「若き日の私」の 壇がつくつた。その頃は何の事やらわからなかつたのにといふ。おもふに? 啄動機とは、時間的に同時と解すべきでもない様である。何がわからぬか、その時蒔いた種がいつか芽生える。(『復習 上』155 ~ 158)

「自己」の成長、反省の活動を「復習」という国語教育に見出したのである。

第3章 古田国語教育観についての考察

この「復習」を古田拡自身は国語教育にどのようにとり入れようとしたのか、本章では、その点について考察していきたい。

*4 本学会(当時は研究会)の第12回、17回発表において「心内語」の説明は、発表者により行われている。「心内語活動」とは、意味成体を充実させるために行われる心内のことばによる思考活動。論理的思考もその一部であるが、その全体ではないことは注意していただきたい。古田の「ゆたかさ」についても同様である。

*5 生徒たちの「若さ」に求めている。

第1節 教育法の視点から見た古田の国語教育

古田は、芦田恵之助の「七変化教式」に大きく影響されていたことについては、前述の通りであるが、その際に「話しあひ」という教式に注目していたのである。

「問答ではない」と古田が説くように、ここでの「話しあひ」の特色は、「ゆたかさ」の実践にある。他者と話をするにより、多角的な視点が生まれ、それを自分自身が吸収し「ふかさ」へのきっかけを作る。前述の通り「ゆたかさ」は「他にかえる」ものであるから、自己内に「他」が生まれるか、外的なる「他」の存在が絶対不可欠となる。

私が考えるところ、この「ゆたかさ」は生徒たちにとって「教室」という空間がとても重要になるのだと考える。この「ゆたかさ」に類似したものとして「自己相対化」があるが、戦後、西尾実によって「自己反省」には「他」からの批判、指摘が必要であると論じられるところからも、生徒たちの現状から自己内に「他」の存在を自分自身で形成するのは困難であると考える。とすれば、古田自身がその「ゆたかさ」を十分に作るきっかけとなる「話しあひ」の教式に注目したことがよく理解できる。「自己」の「深化」のための「話しあひ」、これは現在の国語教育においても通じる理念である。

第2節 ことばの「よみ」における「骨・肉・髄」

古田は、ことばの構造を「骨・肉・髄」というように表した。骨とは、言表される際に表現者が考える「構想」のことであり、古田はことばの「層」とも表現している。肉は、言表そのもの、これを「面」とよび、髄は、その表現されるものの「心」のことであり、「核」とよんでいる。古田は、この『復習』を上巻のみ出すこととなってしまったのであるが、その上巻には「骨」についてのみ説かれている。

なぜ、古田は「骨」について最初に論じたのであろうか。そこに古田のことばに対する考えがある。

しかして今、「ことば」を表現の面とよべば、「こゝろ」は表現の核である。その面と核をつなぐものに表現の層がある。層は想でありいはゆる構想である。構想をあきらかにして「ことば」が定着されるのはそのためである。意志の方向がみとめられるからである。
(『復習 上』196頁)

ここからもわかる通り、表現の構想には必ず「意志の方向」が見られるのである。とすれば、先程考察した「復習」における「意志」を知るにはとても大切な点であるといえる。表現者の「意志」を知ることが「眞」を知る最大のきっかけとなると考えたからである。

この、「骨」に注目した古田の国語教室には、ことばの助詞のつながりなどに注意しながら進めるといふ、特徴的な点がうかがえる。芦田の実践が、漢字に注目したのに対し、古田がこの点に注目したことは、芦田との教式の違いともいえよう。芦田は「面」におけることばの意義に注目したのに対し、古田はことばの「層」における構想（「意志」）に注目したのである。

この「骨」を軸とした教式が、どのような形で進まれていたか、という点については、内容的立場をふまえての考察が必要となるので、ここでは研究の対象外とする。

第4章 まとめとこれからの課題

古田拓『復習 上』から、国語教育における「復習」の重要性について述べてきたが、この点は「よみ」という視点からだけではなく、国語教育全体を視野に入れて考察しなければなら

ないと考える。例えば、表現の特質として「構想」の重要性について古田は説いているが、これは、現在問題とされている「文法教育」の在り方などを考察するときにもふまえなければならない点であると考え。また、「話しあひ」というキーワードが出てきたが、これは、「話すこと」の教育の意義とは何かという「話しことば教育」において忘れられかけている根本的問題を追究するためにも参考としなければならない。

もちろん「よみ」についても同様である。「眞」の追究と古田は述べたが、現在の国語教育における文学教育も果たして「眞」の追究をふまえた形で教式がとられているのであろうか。

「たしかさ」で止まっている「よみ」の教育は、古田の考える「読む」ことの本質を貫いていないことはおろか、その「文学教材」を読んだともいえない。現在の問題点をもう一度、この「復習」という理念から、考え直さねばならないときが来たのではないかと考える。

今後の課題として、この「復習」理念は、芦田恵之助だけではなく垣内松三の「形象理論」とも大きく関わっているのであるが、その関連性と相違点について比較検討すると共に、古田国語教育観について論究することが挙げられる。現在の国語教育の問題点を追究するためにもやらなければならないことである。